

日中関係とベクトル計算 —答えを0ベクトルにする計算方法—

杜曉駿(ト ギョウ シュン)
(中国人民大学、中国)

要約

日本の指導要領では、高校の数学で「ベクトル」を学ぶ。ベクトルとは、英語で言うと vector、中国語では矢量といい、幾何学的空間内における大きさや方向を持った量のことで、通常矢印を用いて表現する。ベクトルは絶対的な量を表すスカラー量(標量)とは違い、その力に方向が関係してくる。つまりただ量を足し算、引き算するだけでは答えは出ず、その力同士がどこの方向を向いているかによって、答えの大きさや方向が変わってくるのである。このベクトルの概念は幾何学的な空間内で用いることが多いのだが、人と人とのつながりにも応用できる。なぜなら人間関係にも、思いの「強さ」と「方向」があるからである。ゆえに例えばある問題が起こったとき、両者のその問題に対するベクトルが、同じ強さで、同一線上に向き合えば、その問題は打ち消される(0ベクトルになる)という考えが可能なのだ。ある夫婦の間で喧嘩が起こったとする。原因は、夫は妻がほかの男性と食事をしてきたことに対する不満、一方妻は夫が脱いだ靴下をそのままにしていることへの怒りだとしよう。当然両者が互いの主張を言い張るだけでは仲直りはできない。両者の問題解決に対するベクトルの向きが全く違うからである。まずは妻の浮気問題に対して両者のベクトルを合わせる、そのあとに靴下問題に意識を向ければよいのである。解決できるかどうかはさておき、少なくとも仲直りへの道は近くなるはずだ。突然なぜこんな話をするのか、それはこのベクトルの概念がさらに大きな次元、日本人と中国人の関係、さらに言えば日本と中国の関係にも当てはめることができると筆者は考えるからである。このレポートでは、「ベクトル」という観点から日中関係を見つめ、再びかつての日中友好を実現するための方法を考察していきたいと思う。なお、このレポートで出てくる「負のベクトル」とは、親しみを持てない感情の方向を示す言葉である。

1) 中国の日本に対する負のベクトル

大森和夫・弘子夫妻は中国人対象の日本語教材『日本』を出版し、現地の日本語学校で教鞭をとるなど、長く日中関係に尽力してきた。彼らが著した作品で、『中国の大学生 27187人の対日意識』がある。この本は夫妻が彼らの日本に対する意識を明らかにしたものである。中国人大学生を対象に、約6年間にわたってアンケートをとり、中国人の若者を対象としたものである。今回は彼らが実施したアンケートの中から、中国人が日本に親しみを感ぜない理由を引用する。日本人に親しみを感ぜない理由で上げられたのは主に以下であった(主要な

ものをまとめている)。

- ・日本人は中国を侵略したことを認めない
- ・要人の靖国神社への参拝を支持している
- ・侵略戦争、南京大虐殺などの歴史認識と歴史教育ができていない
- ・釣魚島は古来より中国の領土である

(『中国の大学生 27187 人の対日意識』 pp. 33-82 より)

ここで注目すべき点がある。それは中国人が日本(日本人)に親しみを持ってない理由はすべて、戦前もしくは戦中の日本が原因だということである。戦後の日本と中国は1972年に日中国交正常化を果たして以来、日中関係を築き上げてきた。特に経済における結びつきは強く、正常化以降長らく日本は中国の貿易相手国の第一位を占めてきた。中国に対する円借款の面でも、公私合わせて総額70億ドルを提供してきた(『中国人の日本観』 p. 133)。北京空港や市内の鉄道整備、最近では内陸部の環境整備に対して日本から多くの資金援助が施されている(外務省『対中国事業展開計画』・JICA『各国における取組—中国』より)。日中国交正常化の際に、日本は戦争賠償金を払うことを免除された。しかし貿易や円借款などの道で、中国へ大きな貢献をしてきたのである。アンケートにおいて、日本(日本人)に親しみを持ってない理由の中に、戦後の日本に関連する理由を挙げたものがほとんどなかったのは特徴的である。あるとしても、せいぜい「建前」などといった日本人独特の所作に対する嫌悪感くらいである。戦後に日本が中国と築いてきた関係を考えてみても、戦後日本の中に、中国人が親しみを感じない理由などほとんどないことがわかる。つまり、中国人が持つ、日本人(日本)への負のベクトルはすべて、戦前戦中に向いているのである。

2) 日本の中国に対する負のベクトル

それでは次に日本が中国に対して持つベクトルを考えてみる。今一般的に世間で言われている、日本人が持つ、中国(中国人)に親しみを持ってない理由を挙げてみるとおおよそ以下のようによまとめられるのではないだろうか(あくまで一般論であり、筆者の個人的意見ではない)。

- ・不法に海賊版や偽物が流通する模倣国家のイメージ
- ・毒入り餃子事件などに端を発する中国産製品への慢性的不安
- ・反日デモや日本製品ボイコットなどの暴挙に対する衝撃と怒り
- ・尖閣諸島や領海への侵入
- ・中国人旅行者などの日本におけるマナーの悪さへの不快感
- ・日本にも影響する環境問題への不安

意識調査などのアンケートをもとにしていないため、多少のずれは否めないが、おおむね以上の理由が、日本人が中国(中国人)に親しみを持ってない理由だと理解して、大きく語弊を招くことはないだろう。ここで重要なことに気づくことができる。それは、これらがすべて戦後の中国に向けられたものだということである。日本人が持つこれらの理由は一つ一つ見ても、すべて中国において現在進行形で進行している事象なのである。

逆に日本が中国の戦前戦中に対して嫌悪を抱くことは稀である。古くから遡れば、日本は中国大陸から多くの文化を取り入れた歴史があり、遣隋使や遣唐使の時代から幾度となく交流を続けてきた。稲作文化も、宗教も、漢字でさえもすべて中国大陸から日本に入ってきた文化である。日本は古くから中国の恩恵を受けているのであり、当然この時代の中国に対して親しみを感じない理由などない。次に戦中を見てみる(なお 1894 年に朝鮮半島をめぐって日清戦争が起こり、1937 年 7 月 7 日には盧溝橋において日本軍と国民党軍が衝突したことをきっかけに日中戦争が勃発、その後南京に入城し、現在でも論争となっている南京事件が起きた。この一連の 19 世紀後半から 1945 年 8 月 15 日にわたる日本の中国に対する軍事的侵攻をもって、戦中日本と筆者は定義している)。日本が大東亜圏を拡大することを目的に大陸へと侵攻したこともあり、日本と中国の戦争はすべてが、大陸で展開されたものであった。当然ながら中国軍が日本本土に上陸して開戦したという歴史はない。ゆえに、日本と中国の一般人のどちらが被害を被ったかといえば中国側であることは間違いないであろう。どれだけ多くの人とモノが被害を被ったかは、直接その事件への認識の差となって現れる。日本の一般人からしてみれば、軍事に携わる人々が、遠く離れた異国の地で起こした戦争への認識は、あまりにも薄いのである。まして日本人で直接的な被害を被った人は限られてくる。世界的判断からしても、日本が中国へと侵攻し、多くの中国人を苦しめたのは事実であり、日本はいわゆる敵であった。ゆえに戦中において、中国人が日本に対して憎しみを持つことはあっても、日本人が中国に対して恨みや憎しみを持つことはあまりないのである。

以上の根拠から、日本が戦前もしくは戦中の中国に対して嫌悪を抱く理由は考えにくい。つまり日本の中国に対する負のベクトルは戦後へと向いているのである。

3) 答えを 0 ベクトルにする計算方法

二つのベクトル量が同じ大きさで、同一直線状に向き合えば、その和は 0 ベクトルになると前に述べた。ではその方法について考えてみる。

1945 年 8 月 15 日は戦中と戦後を区別する重要な日である。この日、昭和天皇は玉音放送において、日本の降伏を日本国民に伝えた。これをもって天皇を軍の最高指揮官とする大日本帝国の体制は終了し、天皇を象徴とする日本国の時代が始まった。

日本と中国の互いに対する「親しみを感じない理由」を比べてみると、中国側から見ると負のベクトルは戦前戦中の日本、日本側から見ると負のベクトルは戦後の中国に向いていることがわかった。つまり両者の互いに対するベクトルが、同一直線状になく、全く向き合っていない現状が続いているのである。問題を解決する、もしくは解決へと歩みを進めるためには、当事者双方のベクトルを向き合わせる事が何よりも大切である。では双方のベクトルを向き合わせるためにはどうすればよいのか。

中国は現在世界第 2 位の GDP を誇る経済大国となり、2030 年までには経済規模でアメリカを超えるだろうとも言われている。しかしその中心は依然として対外貿易が主流であり、その恩恵が国内へと十分に流れていない。一人当たりの GDP を換算すると、未だに先進国の足元にも及ばないのが現状である。資本は沿岸部に集中し、内陸部から多くの出稼ぎなどの

民工潮が都市部へと流れてきていることから、内陸部と沿岸部との経済格差が未だに大きいことがわかる。見かけは世界第2位の経済大国でありながら、国内では所得格差や雇用問題があふれるなど、今の中国には大きな矛盾が生じていて、多くの人が苦しんでいる。このことから中国が完全に成熟した先進国だと断言するのは難しい。

一方、日本は高度経済成長を経験し、すでに先進国の仲間入りを果たして久しい。日本から見れば、中国のように未だに発展を続けている国の人々の生活様式や態度に違和感を覚えることは仕方のないことなのではないだろうか。中国国内の生活水準が向上し、国民の意識が変わっていけば、模倣文化、民度の問題、マナーの問題、製品の質、いずれも必ずこれから向上していくのである。日本も先進国になる過程で同じ道を歩んできたはずだ。このことを理解していれば、中国人の所作振る舞いが気に入らないとか、中国製の商品に不安があるなどという考えが、中国に親しみを感じない理由に直接繋がることはないかと筆者は考える。

戦中などの過去の出来事に対する認識を変えることは、かなり難しい。特に中国からしてみれば、戦争が起きた場所が大陸内であったため、その分被害者が多く、被害感情もそれだけ大きい。現在でも抗日戦争を題材とした作品が多く中国で放映されているのも、その歴史が深く中国国民の意識の中に根付いている証拠である。つまり中国側からの負のベクトルの向きを変えることは、それほど大変なことなのである。

今のベクトルが向き合っていない状況を解決するには、日本側のベクトルを戦前戦中に向けなおすことが最も簡単な方法だというのが筆者の考えである。中国における歴史教育が徹底されている一方で、日本における歴史教育はかなり曖昧である。それは侵略戦争の真偽や、尖閣諸島(釣魚島)の帰属などの正誤性の問題といった次元ではない。それらの事象に対する歴史教育そのものが徹底されていないのである。今の日本人で、侵略戦争に対する自分なりの歴史認識を持っている者、さらに言えば日本近辺の国境を正確に引ける者がどれほどいるだろうか。教育から意識を変えていかなければならない。意識的に日本人のベクトルの方向を戦前戦中へと向けることが、解決の糸口となると筆者は考えるのである。

日本が中国の認識に合わせよ、と言っているのではない。日本が、中国に対するベクトルを戦前戦中に向けることで、初めて同じ土俵で問題を見ることができるようである。今は両者がただ単に相手を嫌がり、その原因がどこから生まれているのかさえ見えていない状況である。まず、ベクトルを向き合わせることで、問題解決はそこから始まる。

4) 具体的な解決策

ここまで日中間における諸問題の解決方法を、ベクトルを用いて抽象的に論じてきた。著者の見解としては、日本側からそのベクトルを戦前戦中へ向けることが最適な解決策であると述べてきたのだが、最後にそれを実現する具体的な策を2つ提案したい。

まず歴史教育の改善である。日本と中国は地理的に近く、その分古くから密接に関わってきた。何千年もの長い間、互いに良好な関係が続いてきたのである。この長い歴史が、たった数十年の不正常な期間のせいで、完全に冷え切ってしまった。この数十年に日本は無関係ではなく、ゆえに日本人にもこの数十年の歴史を直視する義務がある。社会の歴史教育で、

日中の歴史をより深く扱うことを筆者は提案する。今の時点で中国の教育と内容を合わせる必要はない。主張や認識に差があってもよい。中国と同じ事象を、日本も集中的に教育することで、両国ともにこの問題を放っておくことが難しくなるだろう。逃げてはいけない。それが問題解決の近道となることは間違いない。これこそまさにベクトルが完全に向き合った理想の状態なのである。

もう一つの策は、日本国内のメディアの改善である。書店に行っても、もしくはテレビを見ていても、「中国の良い所」とか「中国のおすすめポイント」などといった、中国の良い文化を紹介する作品がどれほどあるだろうか。おそらくほとんどない。日本人にも親しみが持てるトピックからでもよいから、どんどんと中国の文化を、メディアを通して紹介してはどうだろうか。例えば、美しい中国人女性の写真をまとめたような雑誌を日本で販売すれば、かなりの部数が売れるであろう。日本人男性も単純である。KARA や東方神起などの韓国の歌手グループがあれば日本でも人気になったのであれば、中国の歌手やアイドルもヒットする可能性は大いにある。先日上海で日本のAKB48の姉妹グループであるSNH48がデビューしたが、この逆の現象が日本で起きれば、日中関係改善に大きく影響するであろう。重ねて言うが、何より大切なのは今の日本人が中国に対して持っている、戦後中国への負のベクトルを戦前戦中へと向けることである。現代の中国の良い文化が日本へと入ってくれば、日本からの負のベクトルは自ずとその向きを変えるはずである。その点で日本のメディアの今後に期待したい。

5) 終わりに

中国語に「吃水不忘挖井人」という言葉がある。水を飲むときは井戸を掘った人のことを忘れてはいけない、という意味であり、専ら日中国交回復に尽力した人を指す言葉となっている。この言葉を借りるならば、今はもう日本人も中国人も井戸の水を飲まなくなってしまったのかもしれない。そこに井戸があることさえも忘れてしまったのかもしれない。しかし筆者は井戸の中に清らかで美しく、おいしい水が湧いていると心から信じている。私たちが再び井戸の水を思い出し、私たちの意識を向ければ、心のベクトルを向ければ、またかつてのように日本人と中国人が力を合わせて、水を汲み上げ始める時期は近いと固く信じている。

■参考文献

- ・金谷譲・林思雲『中国人と日本人 ホンネの対話』日中出版(2006)
- ・大森和夫・弘子『中国の大学生 27187 人の対日意識—6 年間・3 回の「アンケート」回答を分析—』日本橋報社(2005)
- ・アレン・S・ホワイトティング著 岡部達味訳『中国人の日本観』岩波書店(1993)
- ・外務省『対中国事業展開計画』http://www.cn.emb-japan.go.jp/oda_j.htm(2013/2/6 参照)
- ・JICA『各国における取組—中国』<http://www.jica.go.jp/china/index.html>(2013/2/6 参照)